

主題	入苑者様が活動的な生活を送れる様に
副題	笑顔溢れる毎日を目指して

余暇活動の充実	QOL 向上	研究期間	14 ヶ月
---------	--------	------	-------

事業所	第二光陽苑		
発表者：山下 健吾（やました けんご）	アドバイザー：		
共同研究者：2 階北フロア職員一同			

電話	03-5991-9917	E-mail	dai2kouyouen@mx5.ttcn.ne.jp
FAX	03-5991-9918	URL	http://www.timelyhit.ne.jp/senyoukai/

今回発表の事業所やサービスの紹介	<p>社会福祉法人泉陽会を母体とする特別養護老人ホーム第二光陽苑は平成 11 年 4 月に設立した特養 80 床・ショートステイ 30 床の従来型特養です。その中で私たちが働いている 2 階北フロアは特養が 27 床、ショートステイが 8 床のフロアになります。平均介護度は 3.6 で軽度の認知症の方、要介護度が高く様々な介助を要する方が混在しているフロアとなっています。</p>
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

普段から職員と入苑者様とが触れ合う時間が少なく、また以前まで実施していた第 1・第 3 日曜日にあったクラブ活動をなくした事で、入苑者様の余暇の時間が減ってしまい、生活の中に刺激が少なくなりました。入苑者様からも、起きて何もする事が無い、日中何もする事がなく退屈であるとのお話しが聞かれ、居室で 1 日を過ごされる方も多く見られ、フロアにおられる方も時間を持て余す事が多かった。このような状況において、職員の間でも入苑者様の生活に刺激が少ないことに問題を感じ、もっと楽しみのある生活を過ごして欲しいとの思いが膨らみ、月 2 回のレクリエーションを行ってはどうかとの意見をもとに、平成 25 年 5 月よりレクリエーションを行う事となった。しかし、レクリエーションを行う事が初めての職員も多く、入苑者様が楽しんで頂けるレクリエーションを実施出来るかどうか不安な部分もあった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

〈研究の目標〉

- ・入苑者様の笑顔が多く見られる様にしたい。
- ・普段の生活の中でも入苑者様に刺激を感じて頂き、楽しみのある生活を提供し、またその追究をしていきたい。
- ・職員がレクリエーションの技術・知識を身に付け、職員間で共有し、活用できるようにする。また、実施していきながら技術・知識が向上できるように取り組んでいく。

〈期待する成果・目的〉

- ・入苑者様に生きがいのある生活を送って頂く。
- ・入苑者様の個々の能力を再発見し把握する。
- ・入苑者様の意欲を高め活動的な生活が送れる。
- ・他者の方との交流を図る事で、施設の中で生活していても、社会参加の機会が増える。
- ・普段の業務の中でも、職員が入苑者様に対して施設の目標でもある「寄り添う姿勢」を意識して接する事が出来るようにする。

《3. 具体的な取り組みの内容》

平成25年4月 レクリエーションの計画を立て、マニュアル・企画書の書式を決める。

平成25年5月 第3日曜日よりレクリエーション計画及び実施（基本第1日曜日と第3日曜日にレクリエーションを行う）。

平成25年8月 レクリエーションの外部研修に参加し、職員間で知識の共有を図る。【研修内容：利用者の心の力と輝きを取り戻すレクリエーションの体験学習】

平成25年12月 レクリエーションを実施しての評価を行う。

平成26年1月 レクリエーションを実施しての評価の見直しと課題の抽出を行う。

平成26年2月 施設内での事例発表を行う。

平成26年3月～4月 次年度に向けてのレクリエーションの計画立てを行う。

平成26年5月 日曜日以外で月1回レクリエーションを行う事を検討し、計画を立て実施する。

レクリエーションの外部研修に参加し職員間で知識の共有を図る。【研修内容：利用者が「よい感じ」を得る為にレクリエーション活動を展開する2つの最重要の技術を体感】

平成26年6月 レクリエーションに参加した入苑者の評価を開始する。またそれに伴い、レクリエーション計画書・報告書の書式の変更をする。

《4. 取り組みの結果と考察》

- 入苑者様の中には積極的に参加される方もいたが、レクリエーションがない日はこれまでと変わらない状況で、一種の行事のようになっている。日々の生活の中の楽しみにも繋がられるようにしていきたいと考えている。
- 入苑者様の隠れた能力の発見にはまだ至らず、生活の中で活かしていない部分もあるが、普段活動的ではない方が身体を動かされたり、笑顔が少ない方の笑顔が見られる様になった等、入苑者様の新たな姿が見られた。また、今までご自分からお話をされる事が少なかった入苑者様が、他の入苑者様や職員とお話する機会が増え一定の評価は出来る。

・職員としては、レクリエーションの計画から実施まで出来るようになり、他の職員のレクリエーションの内容を確認することで幅も広がった。また、入苑者様の指向を考え途中でレクリエーションの内容を変える等、臨機応変に対応が出来るようになった。

・常に寄り添う姿勢を持った上で入苑者様に接する事が出来ているとはまだ言えない部分がある。

《5. まとめ、結論》

職員の入苑者様に寄り添いたいとの気持ちから、レクリエーション活動の開始に繋がり、継続して取り組みを続けたことで、少しずつだが入苑者様が楽しめる環境を作り出すことができた。入苑者様の中には「次のレクリエーションは何をするの？」と職員に聞かれる事もあり、入苑者様のレクリエーションに対する意識は高まってきた。

職員側もレクリエーションの技術は高まっており、一定の評価は出来る。しかし、まだ入苑者様個々の細かな能力やどんな事を楽しみにしているのか等、把握が出来ていない所もあり、参加した入苑者様の評価をもっと細かく行いながら、レクリエーションを実施していく必要がある。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究の発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭で確認を行い、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被る事はないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

特になし。

《8. 提案と発信》

レクリエーションを行う事で入苑者様の楽しみを増やす事は重要だが、普段の生活の中でもレクリエーションの技術・知識を生かし、何気ない会話の中でも、入苑者様が自然に笑顔になれるような楽しい雰囲気、空間を作り出すことも必要であると考えます。

【メモ欄】